

袋草紙に吉備大臣夢違の誦文の歌とて、あらちをのかる矢のさきに立る鹿もちがへをすればちがふとぞきく、拾芥抄に夢誦とて、から國のその、みたけに鳴鹿もちがへをすればゆるされにけり、といふ歌見えたり、いかなる事をよめるにかと、年頃いぶかしくおもひつるに、この武藏の多摩郡松原村阿伎留神社の神主阿留多伎貞樹が、おのれ信友がもとに來かよひて、物かたらふちなみに語りけらく、前年吾里へ筑紫人某が歌などこのめるおもむきにて、諸國をめぐるなりとて、まばし人の家に來返りてありけるが、あるじとものがたりするを、かたはらにてき、をりつるに、さきに紀伊國熊野にもせし時、山路をふみまよひて、からくして谷蔭なるさ、やかなる一家を見つけて、たのみてやどりぬ、獵人の家なりけり、初夜過ぐるころ、若き男の鐵炮を持たるが歸り來て、今日は大鹿に逢ひつれど、え射とらざりつるこそくちをしかりしかとつぶやくを、父と見ゆる翁の、其はちがへせられためりとうちいひてあるに耳とまりて、そのちがへとはいかなる事をするにかと問ふに、鹿の獵人に遭たる時、此方に向きて前足をやりちがへてつき立て、見おこせてある事をするを、ちがへをすといふなり、かれが然して立向へるときは、いかによくまた、めねらひても、いつも射はづしはべるなり、但し若き鹿は然ることせず、大なる老鹿には、おり／＼さることしはべりとこたへたりとて、何とがや古歌を誦して、鹿のちがへをすといふ事、これにて知られたりといへり、さるはいかなる歌のあるにかと問ふに、かのあらちをの云々の歌なるべしといへば、さりけり／＼といひて、さてかたりけるは、おのれが里わたりの山里人の、山深く入らむとするには、まづその山口に向ひ、左の足を上にやりちがへ、つき立て心をふとくもちて入るなり、まかすれば山中にて災に遭ふことなし、また山入ならでも、ことさらなる事ありて、ものへゆくときも、然するならひありといへり、あやしくめづらしきことなり、

〔萬葉集八秋雜歌〕岡本天皇明舒御製歌一首